

蘇軾詩注解（二十一）

山本和義
 蔡毅
 中裕史
 中純子
 原田直枝
 西岡淳
 （南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

陳伯修察院が闕に赴くを送る（一八五五）

張嘉父長官を送る（一八五六）

軾 潁州に在りしとき、趙德麟と共に西湖を治す。未だ成らずして揚州に改めらる。三月十六日、湖成る。徳麟 詩有りて懷わる。其の韻に次す（一八五七）

德麟が西湖新たに成りて懷わるる絶句に次韻す（一八五八）
再び德麟が「新たに西湖を開く」に次韻す（一八五九）

官に到りて倦を病み、未だ嘗て客を会せず。毛正仲 茶を恵む。乃ち端午を以て石塔に小集し、戯れに一詩を作つて謝を為す（一八六〇）

晁无咎学士が相迎うるに次韻す（一八八二）

一八五五（施三十五）

送陳伯修察院赴闕

陳伯修察院が闕に赴くを送る

1 裕陵固天縱

裕陵は固に天縱

2 筆有雲漢姿

筆に雲漢の姿有り

3 嘗重連山象

嘗て連山の象を重ね

4 不數秋風辭

「秋風の辭」を数えず

5 龍騰與虎變

龍騰と虎變と

6 狸豹復何施

狸豹 復た何ぞ施さん

7 我窮真有數

我が窮 真に数有り

8 文字乃見知

文字 乃ち知らる

9 聞君射策日

聞く 君 射策の日

10 妙語發疇咨

妙語 疇咨を発す

- 11 一日喧萬口 いちじつ ばんこうに かもびす
 12 驚倒同舍兒 どうしや じ きやうぐう
 13 豈知二十年 あ 知らんや 二十年
 14 道路猶遲遲 どうろ 猶お遅遅たるを
 15 苦言如藥石 くげん やくせき
 16 瞑眩終見思 めんげん 終に思ひ
 17 屈伸反覆手 くつしん はんぷく
 18 獨於君可疑 ひとり 君に於て疑ふ
 19 四門方穆穆 しもん 方に穆穆たり
 20 行矣及此時 ゆけ 此の時に及べ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。知揚州として揚州にあった。

○陳伯修 陳師錫のこと。伯修はその字。建州建陽（福建省）の人。熙寧年間に進士に登第し、知臨安県から監察御史に転じた。元祐の初めに蘇軾に推挙されて秘書省校書郎となり、後に殿中侍御史、知潁州などを経たが、いわゆる元祐党人とされて官を削られ、六十九歳で卒した。『宋史』巻三四六に伝がある。○察院 監察御史の別称。もとは唐の監察御史の官署のこと（『新唐書』百官志三）。○赴闕 陳師錫が都に赴いたことについては、『統資治通鑑長編』元祐七年六月戊寅の条に、「左奉議郎陳師錫をば校書郎と為す」との記述がみえる。

1 ○裕陵 宋・神宗の陵墓の名で、神宗をさす。『宋史』神宗紀三に「（元豊八年）十月乙酉、永裕陵に葬らる」（宋朝の帝陵の名はいずれも「永」の字を冠する）とある。○天縱 天が許して、ほしいままにさせること。『論語』子罕篇に「固に天 之を縦いままにし將と聖にして、又た多能なり」とあり、朱子の集注に「縦は猶お肆のごとし、限

量を為さざるを言うなり」という。2〇筆有一句 雲漢は、天の川のこと。『詩經』大雅「檣櫓」に、「倬たる彼の雲漢、章を天に為す」とあり、毛伝に「倬は、大なり。雲漢は、天河なり」、鄭箋に「雲漢の天に在るや、其れ文章を為す、譬えば猶お天子の法度を天下に為すがごとし」とある。3〇管重一句 連山は、夏の時代の易の名。『周礼』春官宗伯「大卜」に、「三易の法を掌る。一を連山と曰い、二を歸藏と曰い、三を周易と曰う」とある。『周易正義』卷一「三代の易名を論ず」に引く鄭玄「易贊」及び「易論」に、「夏は連山と曰い、商は歸藏と曰い、周は周易と曰う」とある。象は、易の爻または卦の解釈。一句は、神宗が連山易の爻・卦を重ねた、すなわち易筮をよく行なったことをいう。4〇秋風辞「秋風起こつて白雲飛び、草木黄落して 雁 南に帰る」に始まる、漢・武帝の「秋風の辞」(『文選』卷四五)のこと。馮応榴は、「三・四の両句は、神宗の経義を以て土を取り、詩賦を罷むるを言うなり」という。5〇龍騰一句 龍騰は、龍がおどりあがること。文章や筆勢に勢いのあるさま。盧照鄰「五悲」の「才難を悲しむ」文(『幽憂子集』卷四)に、「高談すれば則ち龍騰豹変し、筆を下せば則ち煙飛霧凝す」とある。虎変は、虎が毛を抜けかわらせて美しくなるように鮮やかであること。『周易』革卦(九五)の象伝に「大人虎変す、其の文炳たるなり」とある。一句は神宗の学問および人格を高く評価する。6〇狸豹一句 狸は、ネコ。揚雄『法言』吾子篇に「聖人は虎別す(別は変に同じ)、其の文炳たるなり。君子は豹別す、其の文蔚たるなり。弁人は狸別す、其の文萃たるなり」とあり、虎の下位に豹と狸が置かれる。一韓智翹は、「サテ、神宗ノ其ノ文章ハ、龍ノ如(ク)ニ騰リ、虎ノ如(ク)ニ変ジテ、文章ニツイテ自由三昧ニシテ、変化無窮ニシテ妙ナル程ニ、其ノ御前デハ、比興ナ人ノオノ狸豹ノ如キ者ハ、其ノ才藝ヲ施スコトヲ得ザルゾ」(『四河入海』卷二の二)と記す。78〇我窮・文字二句 元豊三年(一〇七九)、蘇軾は朝政誹謗の罪に問われて御史台の獄に下り、黄州に流謫されるが、神宗が崩じて後に名譽を回復され、知登州を経て朝に召された。元祐三年(一〇八八)、翰林学士の任に在った蘇軾は宣仁太后と相對し、先帝神宗が蘇軾の文章を読むごとに、「奇才なり、奇才なり」と感嘆しながらも、登用には及ばなかったことを知る(『宋史』蘇軾伝)。二句は、窮地に立つ運命にあった蘇軾だが、その際にも彼の文章は天子に知られていたことをいう。910〇聞君・妙語二句 射策は、漢代の官吏登用試験の一つで、問題を書いた竹の札(策)を伏せおき、受験者を選んで解答させ

たもの。「御容を写せる妙善師に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊三八六頁）を参照。ここでは陳師錫が殿試を受験したことをさす。『宋史』陳師錫伝に「熙寧中、太学に遊び、俊声有り。神宗其の材を知る。廷試に及び、名を奏して甲乙の間に在り。帝偶たま其の文を閲し、屢しば読んで屢しば嘆賞し、侍臣を顧みて曰く、「此れ必ず陳師錫なり」と。封を啓けば果たして然り、擢んで第三と為す」とある。妙語は、詩文のすぐれたことば。『蘇軾詩注解（五）』に収める作品番号一六四九の詩の注を参照。疇咨は、たずね求めること。もとは堯が人物を登用せんとして発したとば。『尚書』堯典に、「疇か咨、時を若えん、登庸せん」（登庸は登用に同じ）とある。12〇同舍見 陳師錫と同時に登第した若者たちのこと。15〇苦言 聞きづらいが役に立つ諫めのことば。忠言。『史記』商君伝に、「貌言は華なり、至言は実なり、苦言は薬なり、甘言は疾なり」とある。○薬石 薬と石ばり。病の治療に用いることから、人の身のためになる言葉や教訓をも意味する。『春秋左氏伝』襄公二十三年に「季孫の我を愛せるは、疾痰なり。孟孫の我を惡みしは、薬石なり」とある。16〇瞑眩 目が眩む。特に、薬がきつくて苦しむことをいう。『尚書』説命上に、「薬瞑眩ならずんば、厥の疾癒えざるが若し」とあり、孔伝に、「薬を服するに、必ず瞑眩の極にして、其の病乃ち除くが如し」という。17〇屈伸 かがむことと伸びること。「屈信」とも表記する。『周易』繫辭下伝に「尺蠖の屈するは、以て信びんことを求むるなり」とある。○反覆手 手のひらをかえす。きわめてたやすいこと。また、簡単に起こること。『史記』陸賈伝に、「二偏將をして十方の衆を將いて越に臨ましめば、則ち越 王を殺して漢に降らんこと、手を反覆するが如きならんのみ」とある。19〇四門一句 四門は、四方の門。穆穆は、徳があつてうるわしいさま。『尚書』舜典に、「四門に賓して、四門 穆穆たり」とある。一句は、今まさに天子が四方から都に賢者を招いていることをいう。

永裕陵にいます帝はまことに天の許したお方、筆を揮えば天にかかる天の川の如き文章が成った。かつては古き世に成った易の道にもよく通じておられ、漢の武帝の「秋風の辞」など物の数とはなさらなかった。龍のおどりあがる勢いと、虎の紋様の美しさを兼ねそなえたその文章を前にしては、豹や猫の凡才ごときは揮う

もおこがましいというもの。

そもそも私の困窮はまことに定めがあつてのことだが、我が文章だけは帝のお目にとまっていた。聞けばあなたが策問に応ぜられたときにも、見事な答案に帝が「ああ、この者こそ」と口を開かれ、それが一日にして無数の人々に喧伝されて、同期の書生たちを驚倒させたとか。

そのあなたが、よもや二十年を経たいまになつても、なお道のりを歩むこと遅々としておられようとは思ひもしなかつた。きびしい言葉はよく効く薬に似て、はじめこそ目が眩んでも最後にはありがたがられるもの。世に「尺取り虫は人の常」とはいうけれど、あなたの場合だって間違ひなくそうなのだ。都で四方の門を開いて美徳ある者を招いている今こそ、行きたまえ。この時をのがさぬように。

一八五六（施三二一六）

送張嘉父長官

張嘉父長官を送る

- | | | |
|---|-------|-------------------|
| 1 | 都城昔傾蓋 | とじょうむかし がいをかたむ |
| 2 | 駿馬初服輶 | しゅんば はじめて輶に服く |
| 3 | 再見江湖間 | ふたたび 江湖の間にみ |
| 4 | 秋鷹已離鞬 | しゅうよう すで鞬を離る |
| 5 | 於今三會合 | いま 今に於て三たび会合し |
| 6 | 每進不少留 | すす 進む毎に少しも留まらず |

- 7 豫章既可識 豫章よしょう 既に識しる可べし
- 8 瑚璉誰當收 瑚璉これん 誰たれか當まさに収おさむべき
- 9 微官有民社 微官びかん 民社みんしゃ有り
- 10 妙割無鷄牛 妙割みょうかつ 鷄牛けいぎう無なし
- 11 歸來我益敬 歸來かえ 我われ益ます敬けいせん
- 12 器博用自周 器うつわ 博ひろくして 用よう 自おのずから周あまねし
- 13 百年子初筵 百年ひやくねん 子しは初筵しよせん
- 14 我已迫旅酬 我われ已すでに旅酬りよほうに迫せまる
- 15 但當寄苦語 但ただ當まさに苦語くごを寄よせて
- 16 高節貫白頭 高節こうせつ 白頭はくとうを貫つらぬかしむべし

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○張嘉父 張大亨だいこうのこと。嘉父はその字。湖州（浙江省）の人。元豐八年（一〇八五）の進士で、太学博士、司勳員外郎を経て直秘閣に至った。春秋の学を修め、『春秋通訓』『五礼例宗』の著がある（『直齋書録解題』卷三）。『春秋』について蘇軾に問うたことが、書簡「張嘉父に与う 七首」「蘇軾文集」卷五三）の「その七」にみえる。○長官官吏の汎称。大岳周崇の引く王注（趙次公）は、このとき張大亨は県令に任ぜられたとする（『四河入海』卷三二の二）。1 ○都城一句 都城は、首都開封のこと。傾蓋は、初めて出合い親しく語り合うこと。孔子と程子が車のほろを傾けて親しく語り合った故事。「邵同年が戯れに賈收秀才に贈るに和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊四二五頁）を参照。2 ○駿馬一句 輶は、車のながえ。大車のながえを輶、小車のそれは輶と称する。服は馬が車に就くこと。蘇軾が張大亨に初めて出会ったとき、駿馬が初めて車を走らせるべく輶に就くように、若き張大亨が才能をあらわしはじめて

いたことをいう。34〇再見・秋鷹二句 鞬は、鷹狩りのとき、鷹をとまらせるため腕に装着する皮製のこて。ゆごと。鮑照「東武吟」『文選』巻二八に、「昔は鞬上の鷹の如きも、今は檻中の猿（猿）に似たり」とある。二人が再びまみえたのは、元豊八年、黃州流謫を経た蘇軾が、知登州に任ぜられて任地に赴く途上、泗州においてである（孔凡礼『蘇軾年譜』中冊六八八頁）。二句は、この時すでに張大亨がその才能を十分に發揮していたことをいう。56〇於今・每進二句 これまで三たび顔を合わせたが、そのつど張大亨に進境があったことをいう。前掲の書簡「張嘉父に与う 七首」の「その一」に、「都下 紛紛として、款奉を遂げず、別後 思念すること深し」とあり、また「汝陰（潁州）は僻陋」とあることなどから、孔凡礼はこの書簡が元祐七年に潁州で書かれたものと推定する。そして、蘇軾が潁州に赴くその前年、元祐六年に二人は都で三度目の対面をしていたのであり、今回は通算して四度目の対面だとする（『蘇軾年譜』下冊九八四頁、一〇三九頁）。7〇豫章 クスノキの類。豫樟とも表記する。『春秋左氏伝』哀公十六年に「豫章を抉きて以て人を殺して、而る後に死す」とあり、杜預の注に「豫章は、大木なり」とある。また、『淮南子』修務訓に、「梗柟・豫章の生ずるや、七年にして後に知る。故に以て棺舟を為る可し」とある。長い年月を経て成長する大木で、良質の木材となる。ここでは張大亨が逸材であることを喩える。8〇瑚璉 祭器の名。宗廟に供える穀物を盛る器で、張大亨が重要な務めを担うに足る人材であることを喩える。『論語』公治長篇に、「子貢（名は賜）問うて曰く、「賜や何如」と。子曰く、「女は器なり」と。曰く、「何の器ぞや」と。曰く、「瑚璉なり」と」とある。9〇微官一句 微官は、等級の低い官職。「張安道が「杜詩を読む」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊七九頁）を参照。民社は、人民と社稷（守り祭るべき土地と神）。『論語』先進篇に、「民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を読みたる後に学ぶと為さん」とある。10〇妙割一句 『論語』陽貨篇に、「子 武城に之きて弦歌の声を聞く。夫子莞爾として笑いて曰く、「鶉を割くに焉くんぞ牛刀を用いん」と」とある。一韓智翹は「博識ノ君子ハ、大國ヲ小國ヲモ、ヨク之（ヲ）治（ムル）ゾ。大器ハ大ニモ小ニモ用（フル）ゾ。……言（フココロ）ハ、此（ノ）人 大材（ナリト）雖（モ）、ヨク小國ヲモ治（ムル）程（ニ）ゾ」と記す。12〇器博一句 『後漢書』伏湛・侯霸・宋弘伝の論贊に、「器博き者は近用無く、道の長ぜる者は其の功速かなり」とある。一韓智翹は、「用ハ受用ゾ。大器ニハ

物ヲ大（イ）ニ入（ルル）モヨシ、小（シ）キ入（ルル）モヨシ。小器ニ八大（イ）ニ物ハ入レラレザルゾ」と記す。
 13 14 ○百年・我已二句 初筵は、饗宴のはじめ。『詩経』小雅「賓之初筵」に、「賓の初めて筵する、左右 秩秩たり」（筵は席に着くこと。秩秩は肅々として秩序あるさま）とある。旅酬は、祭祀の後で開かれる宴席の終わりに、多くの人が互いに杯を交わすこと。『礼記』曾之問に、「祭りは之を如何にせば則ち旅酬の事を行わざる」とある。15 ○苦語 苦言に同じく、聞きづらいが役に立つ諫めのことば。忠告。『蘇軾詩注解（十四）』に収める作品番号一八〇七の詩の注を参照。16 ○高節 節操を高くする。また、すぐれた節操、節義。『莊子』讓王篇に、「節を高くし行いを戾（はげ）まし、独り其の志を楽しんで、世に事めず」とある。

むかし都で初めて出会って語り合ったころは、あなたはながえに就いたばかりの駿馬のようだった。その後、に地方に出て再会したときには、すでに鷹匠のゆごとから飛び立った秋の鷹になっておられた。今までに三たび顔を合わせたことになりましたが、そのたびごとに、たゆむことなく新しい境地に進んでおられます。

長い年月を経て大材となる豫章（クスノキ）のごとく、あなたの才能もはや世に知られてよいはず。貴重なる瑚璉の器を宗廟に収め用いるように、重責に堪えうるあなたを登用する人はいないのでしょいか。

（今回の務めは）微官ではありますがすけれど（任地には）民もおれば社稷もありますから、庖丁の妙手が牛も鶏も選ばぬように、大器のあなたはみごとに治めることでしょう。そして任期が満ちて帰って来たあなたに再びお目にかかったなら、私はますます敬意を抱くことでしょう。「器が大きければ使い道も自ずと広いものだ」と。人生百年、あなたが宴の始まりに臨んでいるとすれば、私の方はもう最後の杯のやりとりが近づいているようなものです。だから、今はただあなたには戒めのことばを贈りましょう。白髪あたまになるまで節義を貫いてください、と。

（担当 西岡 淳）

一八五七（施三二七）

軾在潁州與趙德麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成德麟有詩見懷次其韻

軾（しやく）潁州（えいしゅう）に在りしとき、趙德麟（ちやくてくれん）とともに西湖（せいこ）を治す。未だ成らずして揚州（ようしゅう）に改めらる。三月十六日、湖成る。德麟（とくりん）詩有りて懷（おも）わる。其の韻（いん）に次す

1 太山秋毫兩無窮
2 鉅細本出相形中
3 大千起滅一塵裏
4 未覺杭潁誰雌雄*
5 我在錢塘拓湖淥
6 大隄士女爭昌丰
7 六橋橫絕天漢上
8 北山始與南屏通
9 忽驚二十五萬丈
10 老葑席卷蒼雲空
11 竭來潁尾弄秋色
12 一水縈帶昭靈宮
13 坐思吳越不可到
14 借君月斧修臙臙

太山（たいざん）・秋毫（しゅうこう） 兩つながら窮まり無し
鉅細（きょさい） 本と相形（さうけい）の中より出づ
大千（だいせん）は一塵（いちじん）の裏に起滅す
未だ覺えず 杭・潁（かう えい） 誰か雌雄（しゆう）せん
我れ錢塘（せんとう）に在りて湖淥（ころく）を拓く
大隄（だいてい）の士女（しじよ） 昌丰（しょうほう）を争う
六橋（りくきやう） 横（よこ）さまに天漢（てんかん）の上を絶り
北山（ほくさん） 始めて南屏（なんへい）と通ず
忽ち驚く 二十五萬丈（にじゅうごまんじやう）
老葑（らうほう） 席（せつ）巻（けん）して 蒼雲（そううん） 空し
潁尾（えいび）に竭（けつ）來（らい）して秋色（しゆくしよく）を弄（ろう）すれば
一水（いつすい） 昭靈宮（しやうれいきゆう）を縈帶（えいたい）す
坐（い）ながら吳越（いこえつ）を思（おも）えども到（いた）る可（べ）からず
君（きみ）が月斧（げつぶ）を借（か）りて臙臙（とうとう）を修（しゆ）す

20 二十四橋亦何有
19 換此十頃玻璃風
18 雷塘水乾禾黍滿
17 寶釵耕出餘鸞龍
16 明年詩客來弔古
15 伴我霜夜號秋蟲

二十四橋も亦た何か有らん
此の十頃 玻璃の風に換えんや
雷塘 水乾いて 禾黍満つ
宝釵 耕し出だして 鸞龍を余す
明年 詩客 来たりて古を弔わば
我に伴いて霜夜に秋の虫号かん

〔原注〕 來詩云、與杭爭雄（來詩に云う、「杭と雄を爭う」と）

〔*〕 德麟見約來揚寄居、亦有意求揚倅（德麟 揚に來たりて寄居せんことを約せらる。亦た揚の倅を求むるの意有り）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。ときに知揚州として揚州に在った。

○潁州 治は安徽省阜陽市に在った。○趙德麟 趙令時のこと。德麟はその字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。趙令時のもの詩は伝わらない。○西湖 潁州の西湖をいう。○揚州 治は江蘇省揚州市に在った。蘇軾が知揚州に除せられたのは元祐七年正月のことであった（凡凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇二二頁）。

1 ○太山一句 太山は、泰山のこと。きわめて大きなもののたとえ。秋毫は、秋になって生え変わった鳥獸の細い毛のこと。ここでは太山に対してごく微小なものだとえ。『莊子』齊物論篇に、「天下に秋毫の末より大なるは莫く、而して太山も小と為す」とある。無窮は、無限であること。同じく『莊子』齊物論篇に、「是も亦た一無窮なり。非も亦た一無窮なり」とある。一句は、杭州の西湖も、それより小さな潁州の西湖も、絶対的な道の立場から見れば等しく無限であることをいう。2 ○鉅細 大小をいう。1句の太山と秋毫の対照と同じ。○相形 相対によって形状が

はつきりすること。『老子』第二章に、「故に有無相生じ、難易相成り、長短相傾け、高下相傾け、音声相和し、前後相隨う」とある。30大千 仏教でいう「三千大千世界」のこと。蘇軾は、「端午に諸寺に遍く遊んで禪の字を得たり」詩『合注』卷一八でも、「忽ち登る 最高の塔、眼界 大千を窮む」と詠じている。「辯才老師 龍井に退居し、復た出入せず。……」詩の注『蘇東坡詩選』二六三頁も参照。○起滅 生起することと消滅すること。○一塵 微小なもののたとえ。『蘇軾詩注解』二二に収める作品番号一六〇五の詩の注を参照。4 杭穎 杭州・穎州双方の西湖をいう。蘇軾は知杭州として、また知穎州として、それぞれの地の西湖の改修工事をおこなった。○雌雄 優劣をいう。李白「赤壁の歌、送別」『李太白全集』卷八に、「二龍 争い戦いて雌雄を決し、赤壁 樓船 地を掃いて空し」とある。5 錢塘 いまの杭州市。6 大隄 『樂府詩集』卷四八にみえる無名氏「襄陽樂」に、「大隄の諸女兒、花艷にして郎の目を驚かす」とある。ここでは、杭州の西湖に蘇軾が築いた堤、いわゆる蘇堤のこと。○昌丰 昌は、若々しく美しいこと。丰は、体つきがふっくらして豊かなこと。『詩経』鄭風「丰」に、「子の丰なる、我を巷に俟つ、予の送らざるを悔やむ、子の昌なる、我を堂に俟つ、予の將かざるを悔やむ」とあり、毛伝に「丰は豊満なり」、「昌は盛壯の貌なり」とある。7 六橋 蘇堤にかかる六つの橋。『咸淳臨安志』卷二に、「蘇堤南来第一橋」から「第六橋」までの六橋として、「映波橋」・「鎖瀾橋」・「望山橋」・「庄堤橋」・「東浦橋」・「跨虹橋」の名がみえる。○横絶 橋が西湖にかかっていることをいう。絶は、わたる、よぎるの意。『史記』留侯世家に、「（上）歌いて曰く、「鴻鵠は高く飛んで一挙に千里す、羽翮已に就って四海を横絶す……」」とある。○天漢 天の川。『詩経』小雅「大東」に、「維れ天に漢有り、監みれば亦た光有り」とある。ここでは西湖を天の川になぞらえている。8 北山 杭州西湖の北に聳える諸山のこと。蘇軾には、「連日、王忠玉・張金翁と西湖に遊び、北山の清順・道潜の二詩僧を訪ねて……」（『蘇軾詩注解』五）に収める作品番号一六五二の詩）などのように、西湖の北山が詩題や詩句にみえる作品がある。○南屏 西湖の南にある山の名。「南屏の晚鐘」は西湖十景の一つに数えられる。蘇軾には「南屏の謙師を送る 并びに引」（『合注』卷三二）がある。9 10 忽驚・老葑二句 二句は、蘇軾が杭州西湖の湖面の半ばにはびこっていた老葑（まこもの類）を取り除く大がかりな浚渫工事をおこなったことをいう。蘇軾「杭州

にて度牒を乞いて西湖を開かんことを奏する状」(『蘇軾文集』卷三〇)に、「熙寧中、臣 本州に通判たりしとき、則ち湖の葑合せしは、蓋し十に二三なるのみ。今に至る纔か十六、七年の間に、遂に其の半ばを堙塞す。父老皆な言う、「十年以来、水浅く葑横がり、雲の空を翳うが如く、倏忽として便ち満つ、更に二十年すれば、西湖無からん」と。……輒ち已に官を差わして湖上の葑田を打量るに、計せて二十五万余丈」とある。『蘇軾詩注解』(八)に収める作品番号一六九〇の詩の注も参照。席巻は、蓆を巻くように余さずに取り除くこと。『漢書』項籍伝の賛に賈誼の「過秦論」を引いて、「天下を席巻し、宇内を包挙し、四海を囊括し、八荒を并吞せんとするの心有り」とある。蒼雲は、老葑が雲のごとくに生い茂って、湖面を覆っているさまをいう。11〇竭来一句 去来。竭は去るの意。竭来は、そののちと解することもある(『蘇東坡詩集』第二冊三〇頁を参照)。穎尾は、穎水の淮水への合流点。『春秋左氏伝』昭公十二年に、「楚子 州来に狩りし、穎尾に次る」とあり、杜預の注に、「穎水の尾は下蔡に在り」とある。ここでは穎州をいう。一句は、蘇軾が知穎州として元祐六年閏八月に着任した(孔凡礼『蘇軾年譜』下冊九九六頁)ことをいう。12〇縈帶 帶のようにめぐること。杜甫「修学寺に遊ぶ」詩『杜詩詳注』卷九)に、「徑石 相縈帶し、川雲 自ら去留す」とある。○昭靈宮 張龍公を祀った龍神祠。蘇軾に「昭靈侯廟の碑」(『蘇軾文集』卷一七)がある。『蘇軾詩注解』(十六)に収める作品番号一八一八の詩の注も参照。13〇呉越 江蘇と浙江のこと。ここではとくに杭州をいう。14〇月斧 月の形を整えるために用いる道具。太和年間に鄭仁本のいることが嵩山に行ったときに一人の男に出会った。その男は自分が月のくぼみを修繕する職人であるといって、持っている包みを開いて見せた。「因りて襖を開けば、斤鑿数事・玉屑両裏有り」(『西陽雜俎』卷一)とある。月斧はこの斤のこと。○腫臃 潘岳「秋興の賦」(『文選』卷一三)に、「月は腫臃として以て光を含み、露は凄清として以て凝冷す」とあり、李善注に『埤蒼』を引いて「腫臃は明らかならんと欲するなり」とある。15 16〇二十・換此二句 二十四橋は、揚州の名所。杜牧「揚州の韓綽判官に寄す」詩(『全唐詩』卷五二三)に、「二十四橋 明月の夜、玉人 何れの処にか簫を吹くを教えん」とある。十頃は、穎州西湖をさす。頃は、百畝のひろさをいう。玻璃は、水晶。『旧唐書』高宗紀下に、「支汗都王 碧き玻璃を献ず」とある。ここでは、西湖の湖面の美しさをいう。趙令時『侯鯖録』卷一によれば、二句は、欧陽修が揚州か

ら潁州に着任したとき、西湖を眺めて揚州を懐かしみつづつ詠じた「西湖にて戯れに作りて同に遊ぶ者に示す」詩（『歐陽文忠公文集』巻一二）に、「都て二十四橋の月を將て、換え得たり 西湖十頃の秋」とあるのを踏まえている。17
 ○雷塘 隋の煬帝を改葬した地。揚州の東北に在る。『隋書』煬帝紀に、「大唐 江南を平らぐの後、雷塘に改葬す」とある。蘇軾は「虢国夫人夜遊の図」詩（『合注』巻二七）でも、「人間に俯仰して今古と成る 吳公台下 雷塘の路」と詠じている。○禾黍 いねときび。18 ○宝釵 宝石の飾りのあるかんざし。李賀「美人梳頭の歌」（『李賀歌詩編』巻四）に、「纖手 却って盤ぬ 老梳の色、翠滑らかにして宝釵は簪さんとするも得ず」とある。○鸞龍 鳳凰と龍。ここではかんざしの飾りのこと。19 ○詩客 とともに詩を詠じる訪れ人。ここでは趙令時をいう。白居易「朝より帰り事を書して元八に寄す」詩（『白居易集箋校』巻六）に、「禪僧と詩客と、次第に來たりて相看る」とある。○弔古 往昔をしのぶこと。蘇軾は「是の日 下馬磧に至り、北山の僧舎に憩う……」詩（『蘇東坡詩集』第一冊四六六頁）でも、「客來たつて空しく古を弔す、清淚 悲笳に落つ」と詠じている。20 ○秋虫 杜甫「除架」詩（『杜詩詳注』巻八）に、「秋虫 声去らず、暮雀 意は如何」とある。○「*」 倅は、副官。宋では州の通判を指す。

泰山も秋に生えかわる獣の細毛もどちらも存在は無限であって、大小の違いは相対によって生まれるものです。三千大千世界も塵ひとつの中で生じたりほろんだりするわけですから、杭州の西湖と潁州の西湖のどちらが勝っているかを比べることなどできないように思います。

わたしが杭州で西湖の改修をしましたら、築いた堤の上に女性たちが集って美しさを競い合っていました。その堤には六つの橋が天の川のような湖水を横切ってかかっている、北山と南屏山とがはじめて通じました。何と二十五万丈の湖が、まこもをきれいに取り除いたら黒雲が消えてなくなったかのようなようでした。そのちは潁州にやって来て秋の風情を楽しんでおり、西湖の水が昭靈宮をめぐるように流れています。

何かにつけて杭州を懐かしく思い起こしますが行くことがかなわないので、貴殿のすぐれた腕前をお借りし

ておぼろ月のように美しい西湖の改修をはじめました。ここ揚州には名高い二十四橋がありますが、水晶のような潁州西湖の湖面をわたる風と比べものになりましようか。

煬帝ゆかりの雷塘も干上がって雑穀が茂っています。掘ってみれば鳳や龍の飾りがついた簪が出てくることでしょう。来年貴殿が往時をしのぶためにお出でになったら、ともに詩を作って霜のおりる夜に秋の虫のように吟じることといたしましよう。

一八五八（施三二一八）

次韻德麟西湖新成見懷絶句

德麟（とくりん）が西湖（せいこ）新（あら）たに成（な）りて懷（おも）わるる絶句（ぜつく）に次韻（じいん）す

1 壺中春色飲中仙*

壺中（こちゆう）の春色（しゆんしよく） 飲中（いんちゆう）の仙

2 騎鶴東來獨惘然

鶴（つる）に騎（の）つて東來（とうらい） 独（ひと）り惘然（ぼうぜん）

3 猶有趙陳同李郭

猶（な）お趙（ちよう）・陳（ちん）の李（り）・郭（かく）に同（おな）じき有（あ）り

4 不妨同泛過湖船

妨（さまた）げず 同（どう）に湖（みずうみ）を過（す）ぐる船（ふね）を泛（うか）ぶるを

〔原注〕 謂洞庭春色也（洞庭（とうてい）の春色（しゆんしよく）を謂（い）うなり）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙德麟 趙令時のこと。前の詩の詩題の注を参照。趙令時のもとの詩は伝わらない。

1 ○飲中仙 杜甫「飲中八仙歌」『杜詩詳注』卷二を踏まえていう。2 ○騎鶴 殷芸の『小説』『說郭』卷四六下では『商

芸小説」として、以下の文を収める。殷芸の姓を商の字に作るのは、宋の太祖の父である趙弘殷の殷の字を避けたものである（に、「客の相従う有りて、各おの志す所を言う。或るひとは揚州刺史と為らんことを願い、或るひとは貴財多からんことを願い、或るひとは鶴に騎って上昇せんことを願う。其の一人曰く、「腰に十万貫を纏い、鶴に騎って揚州に上らん」と。三者を兼ねんと欲するなり」とある。『蘇東坡詩集』第二冊五四六頁の注を参照。○惘然 氣落ちしてぼんやりするさま。杜甫「秦州を発す」詩（『杜詩詳注』巻八）に、「豈に復た老夫を慰めんや、惘然として久しく留まり難し」とある。3 ○趙陳 趙は趙令時、陳は陳師道のこと。陳師道については、『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。○李郭 後漢の李膺と郭泰（太）のこと。太原の人郭泰、字は林宗（『後漢書』では范曄の父范泰の諱を避けて郭太と表記する）は、都洛陽で河南尹の李膺（字は元礼、『後漢書』に伝がある）と貴賤を越えた交わりを結んだ。『後漢書』郭太伝に、「（郭太）後に郷里に帰らんとするに、衣冠諸儒の送りに河上に至るもの、車は数千両なり。林宗唯だ李膺と舟を同じくして済る。衆賓之を望んで、以て神仙と為す」とある。○「原注」 洞庭春色は酒の名。知潁州在任のうちに、趙令時が蘇軾に飲ませてくれた。「洞庭の春色 并びに引」（『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八三七の詩）の引の注を参照。

潁州にいた頃は壺の中の「洞庭の春色」を楽しんだ酔いどれ仙人が、鶴に騎^のって東のかた揚州に来て一人ぼんやりとしています。そちら潁州では、いままあなたや陳どのが、かの李膺と郭太よろしく、西湖に船を浮かべてともに遊ぶことがおできになるのですね。

（担当 中 裕史）

一八五九（施三二一九）

再次韻德麟新開西湖

再び德麟が「新たに西湖を開く」に次韻す

- 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 使君不用山鞠窮
 饑民自逃泥水中
 欲將百瀆起凶歲*
 免使甌石愁揚雄
 西湖雖小亦西子
 縈流作態清而丰
 千夫餘力起三閘
 焦陂下與長淮通
 十年憔悴塵土窟
 清瀾一洗啼痕空
 王孫本自有仙骨
 平生宿衛明光宮
 一行作吏人不識
 正似雲月初朦朧
 時臨此水照冰雪
 莫遣白髮生秋風
 定須却致兩黃鵠
 新與上帝開濯龍
 湖成君歸侍帝側
- 使君 山鞠窮を用いずして
 饑民 自ら泥水の中に逃る
 百瀆を將て 凶歲を起こして
 甌石をして揚雄を愁えしむるを免れしめんと欲す
 西湖は小なりと雖も亦た西子
 縈り流れて態を作り 清くして丰かなり
 千夫の余力 三閘を起こして
 焦陂の下 長淮と通す
 十年憔悴す 塵土の窟
 清瀾一洗して啼痕を空しくす
 王孫 本と自り仙骨有り
 平生宿衛す 明光宮
 ひとたび行きて吏と作るも 人識らず
 正に雲月の初め朦朧たるに似たり
 時に此の水に臨みて冰雪を照らせ
 白髪をして秋風を生ぜしむる莫かれ
 定めて須く却って兩黄鵠を致して
 新たに上帝の与に濯龍を開くべし
 湖成らば 君歸りて帝の側に侍せん

20

燈花已綴釵頭蟲

燈花已に綴る 釵頭の虫

〔原注〕 予以穎人苦饑、奏乞留黃河夫萬人修境內溝洫、詔許之、因以餘力浚治此湖（予）穎人の苦た饑うるを以て、黃河の夫万人を留めて境内の溝洫を修めしむるを乞うを奏し、詔ありて之れを許さる。因りて余力を以て此の湖を浚治す

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙德麟 趙令時のこと。德麟はその字。元祐六年から、簽書穎州公事の任にあった。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。趙令時のもとの詩は伝わらない。○西湖 穎州の西湖のこと。『蘇東坡詩集』第二冊一一五頁を参照。

1○使君 州の知事をいい、ここでは元祐六年から知穎州であった蘇軾自身のことをさす。○山鞠窮 泥水に入っても身体にダメージが無いようにする防湿の藁。『春秋左氏伝』宣公十二年に、楚に敗れんとする蕭の還無社を助けようとする申叔展の言葉のなかに、「麦麴（麦のもやし。内乱を防ぐ手立てのたとえ）有るか」「山鞠窮（藁草・芎窮。外患を防ぐ手立てのたとえ）有るか」とある。それについての杜預の注には「麦麴・鞠窮は以て湿を禦ぐ所にして、（還）無社をして泥水の中に逃れしめんと欲す」という。2○饑民 蘇軾は元祐六年十一月に出した「淮南にて糴（か）いよね」を閉じるを奏する状 二首『蘇軾文集』卷三三）ならびに同十二月の「度牒して糴斛斗の準備を賜り、淮浙の流民を賑濟するを乞う状」『蘇軾文集』卷三三）に穎州近郊の民が、旱魃のために糧食が欠乏して困窮をきわめ、流民も多い状況を奏上している。○逃泥水中 ここでは「山鞠窮」の注に引く『春秋左氏伝』の故事を踏まえているが、原注にある黄河を修復するための人夫を穎州一帯の水路の整備にあてたことを指している。3○百瀆 瀆は、用水路、耕地間を流れる水路をいう。○凶歳 飢饉の歳。『孟子』告子上篇に「富歳には子弟に頼きもの多く、凶歳には子弟に暴しきもの多し」とある。4○免使一句 甌石の甌は、儻と同じ。もとは穀物を計量する口の狭い陶器を指すが、転じて少量の糧食のことをいう。『漢書』揚雄伝に「家産 十金に過ぎず、乏しくして儻石の儲え無きも、晏如たり」

とある。ここでは、蜀出身の揚雄（字は子雲）を自らにたとえて、西湖を浚渫したことによって、糧食の心配もなく
なることをいう。5 ○西湖一句 蘇軾は、杭州通判であった熙寧六年（一〇七三）に、「西湖を把って西子に比せんと欲すれば、淡粧 濃抹 総て相宜し」と、西湖の美麗なさまを、春秋時代の越国の美女西施に擬えた「湖上に飲せしが初めは晴れ後は雨ふれり 二首」その二（『蘇東坡詩集』第二冊四八頁）を詠じている。ここでは、杭州の西湖と比べて小さい潁州の西湖も、また西施のように美しいという。6 ○縈流 めぐりながれること。皎然「溪雲」詩（『杼山集』卷六）に「舒卷して意何ぞ窮まらん、縈り流れて復た空に帶ぶ」と雲のさまを詠じている。ここでは西湖の水の動きをいう。○作態 さまざまな姿態を示すこと。『後漢書』曹世叔妻伝に「入りては則ち髪を乱して形を壊し、出でては則ち窈窕として態を作す」とある。○丰 肉付きが豊かなさまをいう。『詩経』鄭風「丰」に「子の丰なる我を巷に俟つ」とあり、その鄭玄注に「丰は豊満なり」という。沈約「少年新婚、之が為に詠ず」詩（『玉台新詠』卷五）に「丰容 姿顔好く、便辟にして言語に工みなり」とある。7 ○余力 『論語』学而篇に「行って余力有らば、則ち以て文を学べ」とある余裕があることをさすが、ここでは原注にあるように、本来黄河修復の任にあるべき人夫を、水路修復に従事させたことをいう。○三閘 西湖の三か所の水門。『蘇軾詩注解（十七）』の作品番号一八二八の詩に「城を築って枯瀆を理め、閘を放って膠艇を起こさん」の原注に「清河・西湖の三閘、君を督して之を成さしむ」とある。8 ○焦陂 潁州の北に隣接する亳州（安徽省）は、古代には焦国と称されていた。その地の池をいう。熙寧元年（一〇六八）に亳州知事であった欧陽修は「焦陂を憶う」詩（『欧陽文忠公文集』卷九）に「焦陂の荷花 水光を照らし、未だ十里に到らずして花香を聞く、焦陂 八月に新たに酒熟し、秋水に魚肥えて鱸は玉の如し」と詠じた。蘇軾はその豊かな焦の池を、この詩から連想したのであろう。○長淮 淮河のこと。杜甫「乾元中、同谷県に寓居して作れる歌 七首」その四（『杜詩詳注』卷八）に「長淮 浪高くして 蛟龍怒る、十年見ず 来たるは何れの時ぞ」とある。9 ○憔悴 疲れ衰えているさま。李白「王昭君 二首」その一（『李太白全集』卷四）に「燕支 長に寒く 雪 花を作す、蛾眉憔悴して胡沙に没す」とある。○塵土窟 俗塵があつまつた様をいう。蘇軾にはほかに「次韻して王鞏に答う」詩（『合注』卷一九）に「我に方外の客有り、顔は瓊の英の如く、十年塵土の窟にあるも、一

寸の氷雪清し」とある。ここでは、窟とは、郭璞「遊仙詩 七首」その一（『文選』卷二二）に「京華は游俠の窟にして、山林は隱遯の棲なり」とある、あつまるところの意と捉えておく。10○清瀾 清らかな波。『孟子』尽心上篇に「水を觀るに術有り、必ず其の瀾を觀よ」とあり、その趙岐の注に「瀾は水中の大波なり」とある。韋心物「再び龍門に遊びて旧侶を懷う」詩（『韋蘇州集』卷七）に「靄靄として都城を眺み、悠悠として清瀾を俯す」とある。○一洗 きれいに洗い流すこと。蘇軾「淨居士に遊ぶ 并びに叙」詩（『合注』卷二〇）では、「願わくは二聖に従つて往き、千劫の非を一洗せん」とある。11○王孫一句 趙令時が宋の太祖の子燕懿王の玄孫であるゆえに王孫という。仙骨は優れた資質が備わっていることをいう。杜甫「孔巢父が病と謝して歸り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す」詩（『杜詩詳注』卷一）に「自ら是れ君の身には仙骨有り、世人那ぞ其の故を知るを得ん」とある。12○宿衛 禁中に宿直して警護すること。羅鄴「老将」詩（『全唐詩』卷六五四）に「年年宿衛して天顏近く、曾て功勲を把つて建章に奏さる」とある。○明光宮 漢の武帝の建てた宮殿。その名を借りて宋の天子の宮殿をさす。蘇軾「劉莘老」詩（『蘇東坡詩集』第二冊一五九頁）の注を参照。13○一行作吏 官吏となって自由を奪われること。嵇康「山巨源に与えて交りを絶つ書」（『文選』卷四三）に「山沢に遊び、魚鳥を觀、心甚だ之を楽しむ。一たび行きて吏と作らば、此の事便ち廢せん。安くんぞ能く其の楽しむ所を捨て、其の懼るる所に従わんや」とある。○人不識 世人は気がつかないこと。韓愈「嗟哉董生行」（『韓昌黎集』卷三）に「嗟哉 董生 孝にして且つ慈しみあり、人 識らずして惟だ天翁（お天道さま）の知る有るのみ」とある。14○朦朧 月の光がおぼろげなことをいう。白居易「嘉陵 夜 懷」有り 二首」その二（『白居易集箋校』卷一四）に「明ならず 闇ならず 朦朧たる月、暖に非ず 寒に非ず 慢慢たる風」とある。15○氷雪 真っ白い肌のさまをいう。『莊子』逍遙遊篇に「藐かなる姑射の山に、神人の居る有り。肌膚は氷雪の若く、綽約たること処子の若し」とある。16○莫遣一句 白居易「初めて官を貶せられて望秦嶺を過ぐ」詩（『白居易集箋校』卷一五）に「草草として家を辞して後事を憂う、遲遲として国を去りて前途を問う、望秦嶺上頭を回らして立てば、限り無き秋風 白鬚を吹く」とあり、劉禹錫「蘇十郎中が病と謝して閑居せし時……」詩（『劉禹錫集箋註』卷二四）に「二卷の素書 永日を銷し、数莖の斑鬢 秋風に対す」とある。ここでは秋風に老身をさら

して空しく過ごすことがないようにという意。17〇兩黃鵠 神の託宣であることを意味する。『漢書』翟方進伝に、翟方進（字は子威）が、大貯水池を撤去したことによって、旱害に見舞われ、民の怨みをつたが、ときの童謡に「陂を壊るは誰ぞ 翟子威、我に豆食を飯せしめ芋魁を羹にせしむ、反せんか覆せんか 陂は当に復すべし、誰か云う者ぞ 兩黃鵠」とうたわれていたという。その「兩黃鵠」の顔師古の注には「言を神有りて来たつて之を告ぐるに託す」とある。蘇軾「子由の『柳湖久しく涸れて、忽ち水有り……』に和す 二首」その一（『蘇東坡詩集』第二冊二五〇頁）の注を参照。なお蘇軾は元祐五年杭州の知事の任にあつて「杭州にて度牒して西湖を開くを乞う状」『蘇軾文集』卷三〇）を作り、この童謡をそこにも引用している。18〇濯龍 天帝の池。張衡「東京の賦」（『文選』卷三）に「濯龍芳林、九谷八溪」とあり、その薛綜の注に「洛陽図經に曰く、『濯龍は池の名』と、故に歌に曰く、『濯龍は望むこと海の如く、河橋は渡ること雷に似たり』と」ある（芳林は苑の名、九谷・八溪は養魚池の名）。『後漢書』許楊伝に「汝南に旧と鴻郤陂有り、成帝の時に丞相の翟方進奏して之を毀敗す。建武中に太守の鄧晨 其の功を修復せんと欲す、（許）楊が水脈に曉るきことを聞きて、召して与に之を議す。（許）楊曰く、『昔 成帝は（翟）方進の言を用い、尋いで自ら夢みて天に上るに、天帝怒りて曰く、『何の故にか我が濯龍淵を敗る』と。是の後 民は其の利を失いて、多く飢困を致す』とある。20〇燈花一句 燈花は、燈心の先端の燃えかすが花の形を成しているもの。喜事の予兆である。韓愈「燈花を詠じて、侯十一に同ず」詩（『韓昌黎集』卷一〇）に「今夕 知んぬ 何の夕べぞ、花は然ゆ錦帳の中、自ら能く雪に当たつて暖かに、那ぞ肯て春を待ちて紅ならん。黄裏 金粟を排し、釵頭 玉虫を綴る、更に煩わす 喜事を将て、来たつて主人公に報ずることを」とある。○「原注」『合注』には無いが、『施注』に拠つて付す。

知事が防湿薬の「山鞠窮」を使うこともなく、飢えた民ぐさは自分たちの力で泥水のなかに（かえつて）生活難を逃れることができた。あちこちの水路を修復することで（生活のかてを得て）飢饉から立ち直り、揚雄の如く、わずかな糧食しかないことに悩まないようにさせたのだ。

潁州の西湖は小振りながら（杭州のそれと同じく美女の）西施のようで、めぐり流れて科をつくって清らかで艶やか。黄河修復のための千人の人夫の力を借りて、三つの水門を作って、焦陂の下で淮河につなげたのである。

ここ十年は塵土に埋もれてやつれていたが、清らかな波にさっぱりと洗われて涙のあとも無くなった。天子の血をひく趙令時どのはもともと卓抜な気骨の持ち主で、つねづねは（天子の側近として）明光宮に宿直しておられたのだ。

このたび地方の官となられたのに、世人には知られていないのは、さながら雲をおびた月がはじめはおぼろであるかのようなのだ。

ときどきこの湖水に臨んで氷雪のごとく清らかなお姿をお見せください、白髪を秋風にさらして託つことありませんように。きっと神のお告げで（かの翟方進とは逆に）あらたに天帝の濯龍の池の工事をされねばならないでしょう。

西湖の工事が完成したあかつきには、あなたは朝廷に帰って皇帝のおそばにお仕えすることになりました。なぜなら燈心がすでに吉兆を示す花を結んでおりますゆえ。

（担当 中 純子）

一八六〇（施三二一〇）

到官病倦未嘗會客毛正仲惠茶乃以端午小集石塔戲作一詩爲謝

官に到りて倦を病み、未だ嘗て客を会せず。毛正仲 茶を恵む。乃ち端午を以て石塔に小集し、戯れに一詩を作って謝を為す

19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
金釵候湯眼 鼎器手自潔 坐客皆可人 蜀井出冰雪 禪窗麗午景 歌舞菰黍節 爲君伐羔豚 遠致紫玉玦 空煩赤泥印 奉使免内熱 爨無欲清人 每愧廚傳闕 謬爲淮海帥 過午食輒噎 爾來又衰病 養此膚寸舌 胡爲設方丈 一飽萬想滅 我生亦何須

我が生 亦た何をか須めん
一飽すれば 万想滅す
胡爲れぞ 方丈を設けて
此の膚寸の舌を養わん
爾来 又た衰病
午を過ぎて食すれば輒ち噎ぶ
謬って淮海の帥と爲り
毎に廚伝の闕くるを愧づ
爨ぐに清しからんと欲する人無く
使を奉じて内熱を免る
空しく赤泥の印を煩わして
遠く紫玉玦を致す
君が爲に羔豚を伐って
歌舞せん 菰黍の節
禪窓 午景麗しく
蜀井 冰雪を出だす
坐客 皆な可人
鼎器 手自ら潔くす
金釵 湯眼を候い

20 魚蟹亦應訣

魚蟹ぎまかい 亦た訣けつにおう応ず

21 遂令色香味

遂つひに色香味しきこうみをして

22 一日備三絕

一日いちじつに三絶さんぜつを備えしむ

23 報君不虛授

君きみに虚むなしく授けざるを報ず

24 知我非輕啜

我が輕かろがろしく啜のむに非あらざるをし知れ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○毛正仲 毛漸のこと。正仲はその字。衢州江山（浙江省）の人。進士に及第して地方官を歴任し、元祐七年六月には江東兩浙轉運副使に在官していた（『統資治通鑑長編』卷四七四）。後に吏部右司郎中として入朝し、また陝西轉運使などの地方官をへて、五十九歳で没し、龍圖閣待制を贈られた。『宋史』卷三四八に伝がある。○石塔 揚州にあった寺の名。蘇軾に、石塔寺とそれになつわる故事を詠じた「石塔寺 并びに引」〔合注〕卷三五）がある。

3 ○方丈 一丈四方のこと。『孟子』尽心下篇に「食前方丈、侍妾数百人なるは、我れ志を得るも為さざるなり」とある。趙岐の注によれば、食前方丈とは、大量のご馳走が目の前に並んでいること。4 ○膚寸 わずかの長さ。『春秋公羊伝』僖公三十一年に、「膚寸にして合す」とある。何休の解説によれば、膚は四本の指を並べた長さ、寸は指一本の長さ。「膚寸の舌」に類する表現として、『史記』平原君伝に、「毛先生、三寸の舌を以て、百万の師よりも彊し」とある。6 ○過午 仏教の戒律では、僧たちは正午が過ぎてからは食事をしない。○噎 むせる。食べ物がのどにつかえる。7 8 ○謬為・每愧二句 淮海は、揚州のこと。『尚書』禹貢に、「淮海は惟揚州」とある。廚伝は、料理場と宿舎。来客をもてなす飲食や宿のこと。『漢書』宣帝紀の元康二年の詔に、「或いは擅たいままに繇役を興し、廚伝を飾り、称かえて使客を過かす」とある。顔師古の注に韋昭を引いて、「廚は飲食を謂い、伝は伝舎を謂う」という。蘇軾「揚州の公使の錢を申明する状」〔蘇軾文集〕卷三五）は、揚州は交通の要衝で、来客の接待に費用がかさむことを述べる。二句は、自分は揚州という豊饒な土地の長官であるのに、不十分な接待しかできずに慚愧の念を抱くこ

とをいう。9 10 ○爨無・奉使二句 爨は、飯を炊くこと。奉使は、つつしんで天子の使者となる意で、地方官を務めることをいう。内熱は、体内に熱を発する病氣。『莊子』人間世篇に、国使として齊に赴くことになった楚の葉公子高が、「吾が食や粗を執りて臧からず、爨に清しきを欲する人無きに、今吾れ朝に命を受けて夕べには水を飲めり。我れ其れ内に熱あるか」と嘆く一節がある。「爨に清しきを欲する人無し」とは、煮炊きにあまり火を使わないので台所に熱がこもらず、料理人たちも涼みたいと思わない意で、食事が質素なこと。二句は、自分の食事は葉公子高と同じく粗末なものだが、天子の命を奉じて使者となっても、子高のように体内で熱を出すことは免れていることをいう。11 ○赤泥印 茶の包みに押された印。劉禹錫「西山の蘭若に茶を試みる歌」(『劉禹錫集箋註』卷二五)に「何ぞ沉んや 蒙山・顧渚の春、白泥赤印 風塵に走るをや」(蒙山・顧渚は銘茶の名)とある。12 ○紫玉玦 紫玉は、紫色の宝玉。祥瑞を招くとされる。『宋書』符瑞志下に、「黄銀紫玉、王者 金玉を藏せざれば、則ち黄銀紫玉の光深山に見らわる」とある。玦は、おびだまの一つ。環状で一部分が欠けた佩玉。紫玉玦は、ここでは餅茶を指す。宋の蔡襄『茶録』上篇・論茶「色」によれば、餅茶はその表面に油が塗られており、青・黄・紫・黒などの色を呈する。13 ○伐 屠ること。○羔豚 子羊と子豚。14 ○菰黍節 端午節のこと。菰黍は、ちまき。『藝文類聚』卷四「歲時中」五月五日の条に引く『風土記』に、「仲夏の端五、鷺を烹て、角黍をくらう。端は、初なり。五月の初五日を謂うなり。又た菰葉を以て粘米を裹みて煮熟す、之を角黍と謂う」とある。15 ○禪窓 禪寺(石塔寺)の窓。○午景 昼の日光。16 ○蜀井 揚州の蜀岡という丘にあった井戸を指す。○氷雪 清らかな井戸水のこと。17 ○坐客 歐陽修「新茶を嘗めて、聖俞に呈す」詩(『歐陽文忠公文集』卷七)に、「泉甘く器潔くして天色好し、坐中揀択して客も亦た嘉し」とある。○可人 とりえのある人物。『礼記』雜記下に、「孔子曰く、管仲は盜に遇い、二人を取り、上げて以て公の臣と為す。曰く、「其の手に遊ぶ所辟なればなり、可なる人なり」とある。孔穎達の疏によれば、可人は信頼できる人という。18 ○鼎器 茶道具のこと。19 ○金釵 金のかんざし。ここでは借りて女性を指す。白居易「思黯が戯れに贈るに酬う」詩(『白居易集箋校』卷三四)に、「鍾乳三千両、金釵十二行」とあり、その自注に「思黯は自ら前後鍾乳三千両を服して甚だ力を得、而して歌舞の妓の頗る多きを誇る」とある。○候湯眼 沸いた湯の泡(眼)

をうかがい見ること。20〇魚蟹 魚眼と蟹眼。湯が沸き始めたときの小さな泡を蟹眼といい、大きくなった泡を魚眼という。「試院に茶を煎る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三三六頁）を参照。以上の二句は、官妓たちの点茶のわざが巧みであることをいう。21 22〇遂令・一日二句 色香味は、白居易「荔枝図の序」（『白居易集箋校』卷四五）に、「二日にして色変じ、二日にして香変じ、三日にして味変じ、四五日より外は、色・香・味^{ことば}尽く去る」とある。三絶は、特に優れた三つのもの。贈られたお茶を褒める意を込める。

わが人生に今さら何を求めようか、満腹にさえなればすべての想念が消えていく。ご馳走を山ほど作っても、養うのはただかこの一寸の舌にすぎないのだ。ましてここに赴任してからはさらに老い衰えて病気がちになり、お昼過ぎに（戒律を犯して）食事をとると、いつだって喉につかえてしまう始末。

分不相応にも交通の要衝である揚州の長官となって、いつも（予算不足に因る）もてなしの粗末さを恥ずかしく思っている。煮炊きにあまり火を使わないので炊事場が（涼を入れるほどには）暑くなることもなく、あの葉公子高のように食事も質素なものだ。それでも天子の命を受けた使者でありながら、（なさけないことに）子高のように腹が熱くなってしまうことは免れている。

このたびは私のこときつもらぬ者に、封泥付きの荷に仕立てて、遠路はるばる紫玉の銘茶を送ってくださいました。ご厚意に感じて、立派なお茶をいただくにふさわしいよう、まず子羊や子豚を屠り、歌と踊りの宴を開いて（例の如く）端午の節句を祝いましょう。ここ石塔寺の窓からは麗しい日光が差し込み、蜀岡の井戸から湧き出た氷雪のような清水を準備しました。同席の方々は立派な人物ばかりで、茶道具は私自ら手で洗ひあげてあります。官妓たちはお茶の淹れ方が上手で、沸し具合もちょうどいい具合です。かくしてお茶の色と香りと味という、いわゆる三絶が一日で揃いました。あなたのお気持ちが無駄になっていないことをお知らせします。こちらで軽々しい飲み方をしたのではないことを、どうぞお分かりください。

一八八二(施三一・二)

次韻晁无咎學士相迎

晁无咎學士が相迎うるに次韻す

- | | | | | | | | | | | | | |
|------------|----------------|-----------------|-------------------|---------------------|---------------|-------------|--------------|-----------------|-------------------|------------|-----------------|-------------|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 夢中仇池千仞巖 | 伴我真能老淮海 | 避人聊復去瀛洲 | 枉尺知君有家戒 | 裴回未用疑相待 | 嚴徐不敢連尻脰 | 端如太史牛馬走 | 虹霓吞吐忘寒飢 | 有子不爲謀置錐 | 坐却秦軍發墨守 | 胸中自有談天口 | 閉門却掃卷旆旌 | 少年獨識晁新城 |
| 夢中の仇池 千仞の巖 | 我に伴って真に能く淮海に老ゆ | 人を避けて 聊か復た瀛洲を去り | 枉尺 知んぬ 君が家の戒有ることを | 裴回して未だ用いられず 相待つかと疑う | 嚴・徐 敢えて尻脰を連ねず | 端に太史が牛馬走の如く | 虹霓を吞吐して寒飢を忘る | 子有り 為に錐を置つるを謀らず | 坐ながら秦の軍を却け 墨が守を發く | 胸中自ら談天の口有り | 門を閉ざして却掃して旆旌を巻く | 少年 独り識る 晁新城 |

- 14 便欲攬我青霞幘
便ち我が青霞の幘を攬らんと欲す
15 且須還家與婦計
且く須く家に還つて婦と計るべし
16 我本歸路連西南
我れ本と歸路 西南に連なる
17 老來飲酒無人佐
老來 酒を飲んで人の佐くる無く
18 獨看紅藥傾白墮
ひと 紅藥を見て白墮を傾く
19 每到平山憶醉翁
平山に到る毎に醉翁を憶う
20 懸知他日君思我
懸かに知る 他日 君が我を思わんことを
21 路旁小兒笑相逢
路旁の小兒 笑つて相逢い
22 齊歌萬事轉頭空
ひと 齊しく歌う「万事転頭に空し」と
23 賴有風流賢別駕
賴いに風流の賢別駕有り
24 猶堪十里卷春風
猶お十里春風に卷くに堪えたり

○元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○晁无咎字士 晁補之のこと。无咎はその字。蘇軾「新城の陳氏の園。晁補之の韻に次ぐ」詩『蘇東坡詩集』第三冊三六二頁）の詩題の注を参照。この時、晁无咎は、揚州通判であった『続資治通鑑長編』卷四五三、元祐五年十二月戊申の記事）。晁補之の原詩の詩題に「東坡先生 移りて広陵に守たり、詩を以て往きて迎う。先生 淮南の早を以て、書中に虎頭祈雨の法を教う。始めて諸祠に走りて、即ち甘沢を得たり。因りて賀を為す」『鷄肋集』卷一三）とあり、本詩の題に「相迎」と言うのと符合する。

1 少年一句 晁新城は、晁无咎の父・晁端友のこと。字は君成。新城県（浙江省）の令（県長）であった。蘇軾「新城の道中 二首」その二『蘇東坡詩集』第二冊五〇五頁）の注を参照。その生卒年は未詳であるが、黃庭堅「晁君

成の墓誌銘」(『黃庭堅全集』卷三二)に、四十七歳で没したとあり、また、熙寧乙卯(二〇七五)に京師で病臥したとある。蘇軾「晁君成詩集の引」(『蘇軾文集』卷一〇)に「乃者 杭に官たり。杭の新城令晁君君成、諱は端友なる者は、君子人なり。吾れ之と遊ぶこと三年、其の君子為るを知りて、而も其の文と詩とを能くするを知らず、而も君も亦た未だ嘗て一語も此に及ぶ者有らず」とあり、蘇軾が通判として杭州に在った熙寧四年(二〇七二)から七年(二〇七四)の間に交流があったことがわかる。時に蘇軾三十六、四十歳、晁補之は二十歳前後、その父端友は、蘇軾より十歳余り年長であったと推測される。2〇却掃 退いて門前を掃きよめておく。門をとざして客に会わないことをいう。蘇軾「周長官・李秀才と徑山に遊ぶ……二首」その二(『蘇東坡詩集』第三冊六〇頁)の注を参照。〇卷旆旌 はたを巻く、ひいては退陣すること。1句の注に引く蘇軾の詩に「散材 見んことを畏る 林を搜る斧、疲馬 聞かんことを思う 旆を巻く鉦」とある、その注を参照。3〇談天口 天を談する口とは、談論の氣宇のきわめて壮大なるをいう。『蘇軾詩注解(十九)』に収める作品番号一八三七「洞庭の春色 并びに引」の注を参照。4〇坐却秦軍 知謀によって強敵を退けること。戦国時代に、齊の魯仲連がその知謀によって、趙を包囲した秦軍を退却させた故事を踏まえる。『蘇軾詩注解(十四)』に収める作品番号一八〇六の詩の注を参照。〇堯墨守 堅い守りを撃ち破ること。墨守は、春秋時代、墨翟が宋の城を堅く守る策を立てた故事にもとづく。3句で、晁端友が、氣宇壮大な談論をする才を秘めていることを述べたのをうけて、それがどういったものであるかを二つの故事を引き合いにして示している。5〇有子一句 置錐は、錐をたてるのがやうというくらいにわずかな土地のこと。一句は、『莊子』盜跖篇に「堯・舜 天下を有つも、子孫に錐を置つるの地無し」とあるのを踏まえ、晁端友が、子孫のために自らの地位や財をわずかも残せなかった人であることを述べている。6〇虹霓一句 虹霓は、虹。蘇軾「八月十五日に潮を見る 五首」その五(『蘇東坡詩集』第二冊四九頁)の注を参照。吞吐は、呼吸する。一句は、34句で述べるように氣宇壮大な談論の才を発揮した晁端友が、自らの暮らし向きには頓着しなかったことをいう。7〇太史牛馬走 太史公の僕。司馬遷の謙称。太史は、太史公(司馬遷の父・談を指す)。牛馬走は、走り使い。司馬遷「任少卿に報ずる書」(『文選』卷四二)に「太史公の牛馬走・司馬遷、再拜して言す」とある。一句では、晁補之を司馬遷に擬えて

いる。8 ○敵徐一句 敵・徐は、敵安と徐樂。連尻厓は、比肩すること。漢の武帝が、東方朔に対して、敵安・徐樂を含め、朝廷にひしめく賢才多数の名を挙げ、朔自身と比べてどう思うか尋ねたところ、東方朔は、「股と脚を結び、尻と厓を連ね」云々と、比肩するものの喩えを幾つか示してみせ、自分はその数人分の才を兼ねていると答えた『漢書』東方朔伝。梁・任昉「勅して七夕の詩を示さるるに奉答する啓」(『文選』巻三九)に「晩に天飛に属し、敵・徐に比びて詔を待つ」とある。『四河入海』巻一九の三に引く「韓智翹の聞書に「云(フココロ)ハ、敵・徐ガ輩ハ、司馬遷ナンドト肩ヲ比ベテ踵ヲ接スルコトハ、エセマイゾト云(フ)心ゾ」とある。9 ○裴回 徘徊。歩きまわること。徘徊に作るテキストもある。『後漢書』馮衍伝下に「大路に遵って裴回し、孔徳を履みて窈冥たり」(孔徳は大きい徳)とある。10 ○枉尺 大きな道(成果)を得られるなら、少しばかり節を屈することなど構わないという考え方。『孟子』滕文公下篇に「尺を枉げて尋を直くす」という話を引き合いに陳代が薦める処世態度を、孟子が非難する話が見える。蘇軾「餼節推を送る」詩(『合注』巻一九)に「我が生命有らず、其れ肯て尺尋を枉げんや」とある。一句では、9句で、晁補之がなかなか登用されず足踏みしているかに見える述べたのを承けて、君(晁補之)は、成果を達せられるなら、小節を屈しても構わないというような生き方を、晁家、分けても父・端友から厳しく戒められているのしょうと述べている。11 ○避人 俗な世間から離れる。蘇軾「普照自り二庵に遊ぶ」詩(『蘇東坡詩集』第二冊四九八頁)に「詩を作って寄せ謝す 採薇の翁に、本と人を避けず 那ぞ世を避けんや」とある。○瀛洲 東海中の三神山の一つ。仙界。ひいて、朝廷のこと。唐の初め、房玄齡・虞世南など十八名が、その肖像画を宮廷に飾られ、文学館学士として太宗に厚く遇された。そのことが、人々から「登瀛洲」と喩えられた(『旧唐書』褚亮伝)。ここでは、それを借りて「去瀛洲」と言い、晁補之が、校書郎から揚州通判に転出した(『宋史』の伝)ことを指す。かつ、それが晁補之の自らの願いによるものであることも含意するか。一韓智翹の聞書に「言(フココロ)ハ、無(无)咎 今朝廷ノ官職ヲイヤト云(ヒ)テ捨(テ)去(ツ)テ朝廷ヲ出(ツル)ヲ云(フ)ゾ。朝廷ヲ去(ツテ)我ニ随(ツ)テ揚州辺マデ来ルゾ」とある。12 ○淮海 揚州一帯の地。13 ○夢中一句仇池は、秦州(甘肅省)付近にある山の名。蘇軾「双石」詩(詩人選集『蘇軾』下・五一頁)の序に「潁州に在りし

日、人の一つの官府に住せんことを請い、傍に「仇池」といえるを夢みしが、覚めて杜子美の詩を誦したりき」とある。その注を参照。一韓智翹の聞書に「以下ノ四句、言（フココロ）ハ、坡曾テ夢ニ仇池ノ仙郷ニ遊（シ）デ、遂ニ真住ノ意有（ル）ゾ。サル程ニ、无咎ドノモ我ガ青霞幃ヲ取りアツレテ、行カントヲセラルレドモ、其（レ）ハソコツナコトゾ。先（ヅ）帰（ツ）テ妻ト談合アレト云（フ）ゾ」とある。14○青霞幃 霞でできた垂れ衣。梁・江淹「恨みの賦」（『文選』卷一六）に「青霞の奇意を鬱し、修夜の明けざるに入る」とあり、李善の注に「青霞の奇意は、志言 高きなり」とある。13句で夢に仇池を見たと詠じたのを承けて、蘇軾は、仙境をめざす志の高さを示す衣をまとう者に自らを擬している。15○且須一句 楚の莊王が優孟を相に取り立てようとする、優孟が「歸りて婦と之を計らんことを請う」と言った（『史記』滑稽伝。一句は、晁補之に対して、蘇軾に随伴して隠逸をめざす旅をするかどうかは、奥さんと相談してみなさい、と勧めている。16○我本一句 西南は、蘇軾の故郷・眉州眉山（四川省）を含む、宋の西南一帯のこと。蘇軾が、西南を歸路と詠じた例として、蘇軾「九日 袁公濟に詩有り、其の韻に次す」（『合注』卷三三）に「笑って西南を指す 是れ歸る路、飛ぶに倦む弱羽は久しく還らんことを知る」がある。17○老来一句 佐は、側で勧める。『国語』晉語に「之を召して食を佐めしむ」とあり、韋昭注に「佐は、猶お勧むるのごとし」とある。一句で、蘇軾が、酒を勧めてくれる人がいないと歎じる、その人とは、宴席で貴人の側近く侍って酒や食事を勧める妓女を指すであろう。後の23 24句で、春風が巻き上げる珠簾の向こうにいるはずの妓女の姿が暗示されるのと係けて解される。18○紅葉 紅芍薬。齊・謝朓「中書省に直す」詩（『文選』卷三〇）に「紅葉は階に当たりて翻り、蒼苔は砌に依りて上る」とある。芍薬の花は、初夏に咲いて、赤、白、紫など数種のものがあり（『国訳本草綱目』草部・芍薬）、とりわけ、揚州の芍薬は名高く、宋・王観の『揚州芍薬譜』に「洛陽の牡丹、維揚の芍薬」と並称される。○白墮 酒造りの名人の名。『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八四三の詩の注を参照。ここでは、名人の醸した酒を言う。19 20○每到・懸知二句 平山堂は、堂の名。慶曆八年（一〇四八）二月、歐陽修が揚州の大明寺の敷地内に造らせた（『輿地紀勝』卷三七）。醉翁は、歐陽修のこと。知滁州の任にあった時、「醉翁亭の記」を著し、醉翁と号した。『蘇軾詩注解（十七）』に収める作品番号一八二八の詩の注を参照。懸知は、遠い過去・遠い

将来のことをありありと目に見えるように思い浮かべること。二句は、平山堂に遊ぶ毎に、堂を修築した、今は亡き欧陽修の姿をありありと思い起こすと詠じ、晁補之に向かって、欧陽修が没してから既に二十年、自分がこうして欧陽公を思い起こすように、遠い将来、君が揚州に遊んだ時には、ありありと私を思い出してくれるに違いない、と言っている。2122〇路旁・斉歌二句 笑相逢は、じゃれて集まること。晉の永嘉中、襄陽に鎮した山簡が、荊州の豪族たちの佳麗な園池に遊んでは、酒を飲んで酩酊する日々を過ごしていた。襄陽の童児は、これをからかって歌いはやしたという『晉書』山簡伝。李白「襄陽の歌」に「襄陽の小児 齊しく手を拍ち、街を攔って争い唱う 白銅鞮」（『李太白全集』巻七）とある。軾頭は、瞬く間。蘇軾「西江月（三たび平山堂の下に過り、……）」詞（『東坡樂府箋』巻一）に「言う休かれ 万事 頭を転じて空しと、未だ頭を転ぜざるに時皆な夢なり」とあり、これは、白居易「自詠」詩（『白居易集箋校』巻三四）に「百年 手に随いて過ぎ、万事 頭を転じて空し」とあるのを踏まえる。二句は、かつて蘇軾が唐の白居易の詩句を踏まえて詠じた詞の一節が、揚州の童児の間で、今に至るまで歌い継がれているさまを詠じている。23〇賢別駕 別駕は、知事の副官。通判である晁補之を指す。一韓智羽の聞書に「言（フコロ）ハ、頼（ヒ）ニ揚州ニハ風流ナル別駕ノ无咎ドノ御ワタリ有ル程ニ、十里バカリノ間、美人ドモノヲル処ノ珠簾ヲ捲（キ）テ、遊（ブ）ベキゾ」とある。24〇猶堪一句 一句は、杜牧「贈別 二首」その一（『樊川文集』巻四）に「春風十里 揚州の路、珠簾を巻き上ぐるも総て如かず」とあるのを踏まえる。蘇軾「戯れに贈る」詩（『蘇東坡詩集』第二冊四〇三頁）の注を参照。なお、揚州、平山堂、春風のつながりは、蘇軾から欧陽修への追慕を投影している。2122句の注に引く蘇軾の詞に「文章太守を弔わんと欲して、仍りて楊柳春風を歌う」とあり、その文章太守とは、欧陽修が「朝中措（平山の欄檻 晴空に倚り、……）」詞（『歐陽文忠公集』近体樂府卷一）で自らを指した語であり、また、同じ詞に「手づから堂前の楊柳を種う、別来 幾たびか春風を度る」とあるのを踏まえている。

若い頃から私だけは晁新城（端友）どのの人物をよく存じ上げておりました、旗を収め戦を止めた軍隊さながら、門を閉ざして世間との交わりをきっぱりと絶っておられました。しかし、心の中には気宇広大な話を語

る器量をそなえ、まさに、談笑のうちに手強い秦の軍勢を退けることもできれば、墨子の手強い防禦策さえ打ち破ることができる、というものでした。

そのご子息には、錐を立てるのがせいぜいの土地さえも残さなかったけれど、大空にかかる虹の気を呑んだり吐いたりするような盛んな才気を示して、飢えも寒さも意に介さぬありさまでした。そして、子息であるあなたは、まさに、かの太史公（司馬談）の僕にふさわしく、嚴安や徐樂などはとても足元にも及ばなかったのです。

都に在って登用されずに無聊の日々を送っていたのは、良き出会いを待ってのこととお見受けします、「大きな成功が得られるなら、少しばかり節を曲げるのなど構わない」などという考え方は、あなたのお家ではきつく戒められているのでしょうか。自ら願って世間から離れて宮廷を後にし、私とともに揚州の地で老いてゆくこととしておられます。

夢に見るのは仇池の千仞の巖、そんな私の青霞の垂れ衣を手にとって、隠逸をめざす供をしようとご希望です。まずはご自宅へ帰って奥様に相談なさい、私にとってはもともと西南のかたは故郷への帰り路なので、すから年をとったこの頃は、酒を飲むにもお相伴してもらうこともなく、独り赤い芍薬の花を伴として白堕の名酒を傾けるばかりです。平山堂を訪れるたび、醉翁（欧陽修）どののことを懐かしく思い出す私ですが、いずれはあなたが私のことをこのように思い出してくれるのでしょうか。

道端で子どもたちがじゃれながら集まって、「すべてはあつという間に消えてしまう」と歌っています。あなたがたいことに風流のわかる頼もしい副知事どのがいらしたので、春風が揚州の街十里の珠簾を吹き揚げて揚州の綺麗どころを堪能させてくれるでしょう。

（担当 原田直枝）